

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370273

研究課題名(和文) 変容する「英文学」と映像文化のポリティカル・エコノミー

研究課題名(英文) The Changing Landscape of "English Literature" and the Political-Economy of English Film Culture

研究代表者

大田 信良 (OTA, Nobuyoshi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：90233139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀以降の「英文学」は、英国の大众が読み書き能力を身に着ける社会・教育メディアから、冷戦期米国の大学における研究・教育の教科書として制度化され、冷戦以降の現代には、映画などグローバルなポピュラー・カルチャーの商品として存在している。こうした変容する「英文学」は、様々なメディア空間を横断する「英文学」あるいはその映像文化は、その政治的及び経済的な条件、すなわち、国家・公的機関の様々な政策(ポリティクス)及び出版物・商品の生産・配給・消費に関わる産業・金融構造(エコノミー)の分析に関係づけて捉えること、つまり、映像文化のポリティカル・エコノミーの解釈によって研究するべきであることを論じた。

研究成果の概要(英文)：This research project has shown that the present English Literature since 20th century, or, the changing landscape of "English Literature," itself deeply embedded in and actively engaged with the various developments of globalization and neo-imperialism, cannot be explained enough by the current interpretative schemes of a set of reading practices and literary/cultural interpretations from the liberal viewpoints of gender, race, and sexuality. Rather, taking into consideration the political economy of English film culture, the more adequate interpretation of the changing landscape of "English Literature", or, the transformation of English Studies, I have argued, is explored in its transmedia space of diverse and heterogeneous English cultural productions in which various public and cultural policies is interrelated and criss-crossed in the process of negotiations and (re)appropriations.

研究分野：人文学

キーワード：英文学 映像文化 ポリティカル・エコノミー メディア文化 ポピュラー・カルチャー グローバリゼーション 金融資本 教育

1. 研究開始当初の背景

Fredric Jameson, *A Singular Modernity*(2002)やその他の「英文学」の制度研究がすでに指摘するように、19世紀の末から参政権その他の権利を主張した労働者や女性など新たな市民のために古典文学にかわる教育手段として登場した「英文学」は、第1次大戦前後にコスモポリタンなモダニズムの運動を産み出す一方、20世紀半ば、冷戦期のアメリカの大学という公的研究・教育機関のなかでナショナルに制度化される。そして、その「英文学」とは、モダニズムの運動において生産された個々のテキストが有したグローバルな可能性やラディカルな政治性をアメリカの冷戦イデオロギーやナショナリズムによって編制し直したものであった。その後冷戦終了後の20世紀末には、出版・情報ならびに映画の諸産業を垂直および水平統合した多国籍メディア諸企業とそれらによって産み出されるグローバルなポピュラー・カルチャーの出現にともない、自由な競争や消費を基本とする市場からの自律性・独立性を突き崩されたナショナルな「英文学」は、その社会的意義または存在の意味が大きく問われることになった。

このように21世紀に向けていわば「民営化」の方向へ踏み出すかみえた「英文学」は、しかしながら、国家や政府と同様、完全に消滅したり退場したりしたわけではなく、グローバルな文化空間のなかで新たな関係性を結び現代の資本主義世界のなかで従来とは別の意味や機能を担うことになる。イングリッシュネスやブリティッシュネスなど、現代英国のナショナル・アイデンティティの再発明を担った1980年代以降のいわゆるヘリテージ映画、E. M. Forster や Kazuo Ishiguro といった「英文学」作品を原作とする映像文化のテキスト、あるいは、旧植民地の出自を持ちながらディアスポラというコスモポリタンな新たな主体性によって第3世界ナショナリズムとは異なるハイブリディティの存在様態を創造したポストコロニアル文学やその映像文化などが、その端的な例である。こういった点についてはすでに大谷伴子・大田信良ほか編著『ポスト・ヘリテージ映画 サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』(2010)で論じた。

ただしここで注意すべきは、河島伸子・大田信良ほか編著『イギリス映画と文化政策 プレア政権以降のポリティカル・エコノミー』(2012)でも指摘したように、ポスト冷戦以降のグローバル化した現代世界において、英国映像文化のなかに新たに再編され生産・流通・消費される「英文学」のテキストやその商品イメージは、もはや狭義のイギリス映画とはいえない、ということだ。英国国家の文化政策として英国 Film Council や公共放送機関 BBC が宝く

じの予算も活用しながらその制作に関わっている。だがさらに、グローバルな観客を当て込んだ俳優や監督の国籍、制作資金、グローバルな配給ネットワークは、米国ハリウッドの映画産業との複雑に交錯し混濁を考慮することなしには、英国のフィルム・テキストやそこで再使用される「英文学」を解釈することはもはやできない。さらにいえば、現在のこのような状況認識から、戦間期のモダニズムの運動、そして、冷戦期の「英文学」の制度化及び制度化されたモダニズム(のイデオロギー)をあらためて、同時代の福祉社会とその国民主体の成型とともに、問い直す必要がある。

言い換えれば、現代資本主義世界にみられた、国営化(nationalization)やグローバル化(globalization)などの歴史的プロセスに対応した「英文学」のラディカルな変化・変容をたどり、モダニティの歴史的契機を経験した英国の文学と映像文化との重層的な関係性を、具体的なテキストの読みだけでなく、政治的制度や経済構造の分析においても解釈することを要請しているのが、本研究の学術的背景ということになる。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀以降の変容する「英文学」、つまり、英国の大衆が読み書き能力を身に着ける社会・教育メディアから、冷戦期米国の大学における研究・教育のテキスト・教科書として制度化され、冷戦以降の現代には、映画をはじめとするグローバルなポピュラー・カルチャーの商品に姿を変え存続する英語文学を取り上げる。本研究の全体構想は、様々なメディア空間を横断する「英文学」あるいはその映像文化を、その政治的及び経済的な条件、すなわち、国家・公的機関の様々な政策(ポリティクス)及び出版物・商品の生産・配給・消費に関わる産業・金融構造(エコノミー)の分析に関係づけて、捉えることにある。つまり、個々の文学テキストの構造を、ジェンダー・人種・セクシュアリティあるいは帝国主義・グローバリゼーションといった主題によって読むことにとどまらず、映像文化のポリティカル・エコノミーの解釈を目的とする。

3. 研究の方法

英国の歴史的・文化的ヘリテージの再使用・再発明によってグローバル化する「英文学」 例えば、ポストコロニアル文学、ヘリテージ映画といった、ニッチ市場にもかかわらずブロックバスター現象を産み出すことが可能であるようなグローバルな多国籍企業のポスト・フォード主義的生産方式により産み出される展開される商品イメージとしての「英文学」 にも対応可能な文学・文化研究として、文学・映像テキストの文化的生産を扱う研究プロ

ジェクトを提案する。具体的には、変容する「英文学」について、以下の3つの時代区分をおこない、現代から遡行的に歴史的プロセスをたどる。

- (1) .「ヘリテージ映画」と呼ばれる1980・90年代以降のイギリス映画、すなわち、グローバル化する多国籍メディア企業およびそのメディア文化に流用されてきた「英文学」のヘリテージを、ポスト・ヘリテージ映画あるいは英国映像文化の視座から吟味し直す。
- (2) .「英文学」の制度化を、1950年代冷戦期以降におけるアメリカ文学や比較文学研究、さらには、エリア・スタディーズとしてのアメリカ研究との関係性において、歴史化する。と同時に、新たなかたちの比較文学研究・文化翻訳研究のプロジェクトを構想することにより、21世紀になって活発に議論されてきている「世界文学」の編制の再検討も視野に入れる。
- (3) . 福祉国家期における「英文学」の歴史的編制をたどり直す。階級格差や社会流動性との関係において、英国文化を主題とするテキストあるいは雑誌メディアを取り上げ、「英文学」を編制した物質的・経済的条件が、民間のパトロネージから大衆メディアとしての新聞へ、あるいは、大学制度における学術的出版へ、それぞれ変化する歴史的な意味を、教育・文化政策と合わせて、解釈する。

新歴史主義以降の英文学研究において多大な影響力を持ったポストコロニアリズム批評、あるいは、カルチュラル・スタディーズやメディア文化論、等々が現在批判されている研究の枠組——単純な二元論や還元主義に陥る傾向にあった文化/政治という問題機制——に代わり、文化/経済を物質的な条件との関わりにおいて新たなやり方で理論的・政治的に捉えなおす可能性が開かれることに、本研究の学術的な特色・独創性がある。

英国ブレア政権以降の映像文化を踏まえた上でなされる20世紀「英文学」の再解釈は、グローバル化が進行する市場=経済とそれに敵対または順応しながら変容する国家の政策=政治との重層的な関係性を分節化し接合するポリティカル・エコノミーを問題として設定することにより、旧帝国主義・植民地主義から脱植民地主義を経てグローバル化・新帝国主義に至る歴史的プロセス(階級と文化のさまざまな再編)を統一的に捉えられるようになるはずである。とりわけ、ジェンダー・人種・セクシュアリティなどの社会的差異を解釈の論点とした1990年代のさまざまな多文化主義やアイデンティティ・ポリティクスが、グローバルな資本主義の進展やネオリベラリズムのイデオロギーと、少なからず、共振したり親和性があったりした

こと、また、労働のグローバルな分業体制の再編——英国など先進国で製造業が国外へ移転し金融・情報・イメージ産業とフレキシブルな労働が登場したこと——が、白人中産階級の「没落」あるいはスーパー・クラス/アンダー・クラスへの二極化を産み出すとともに、新たに台頭する「国際的中流階級」あるいは英国の白人知識人に代わるディアスポラ知識人・文化人(たとえば、Homi Bhabha)がその機能を果たしたこと、これらのことが、Sarah Brouillette, *Postcolonial Writers in the Global Literary Marketplace*(2007)の出版研究や Bruce Robbins, *Upward Mobility and the Common Good: Toward a Literary History of the Welfare State*(2007)の比較文学研究とは別のかたちで、すなわち、文学的なものと政治的なものが重層的に交錯し変換されうるグローバルな文化空間のエコノミーにおける「英文学」の歴史的プロセスにおいて、明らかにされるはずである。

4. 研究成果

設定された3つの研究主題領域において、それぞれ、以下の研究の成果を得た。

(1) .「ヘリテージ映画」以降の英国映像文化と「英文学」に関しては、Kazuo Ishiguro 論集に寄稿する論考を執筆・提出し、編集・出版の作業が予定より遅れているが、論集の準備を続行している。*The Unconsoled* を再解釈した本論稿は、Salman Rushdie と Ishiguro によってリサイクルされた「名残り("remains")」という歴史的過去の断片的な商品イメージを活用したその美学と地政学を、ポスト冷戦期の1990年代後半に出来た、コソボ紛争と(そのグローバルなコンテキストである)東ヨーロッパのネオリベ化によって、解釈した。

「インターナショナル・ライター」としての Ishiguro とは別のやり方で「英文学」のグローバル化と英国映像文化が交錯する例として、David Mitchell *The Bone Clocks* を取り上げたシンポジウムでの口頭発表「“After Modernism”の政治学と映像文化のエコノミー——グローバル都市ロンドンの社会はいつ存在したのか」、論考「ノエル・カワードと再婚の喜劇としての『或る夜の出来事』——『長い20世紀』のなかの映像文化」であり、英国のガールズ・スクール・ストーリーと成長の問題を「ヘリテージ映画」以降の英国映像文化として論じたものが、大谷伴子との共著「コドモの「居場所」はどこに?——英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』と教育空間の変容」である。さらにまた、こうした成長と教育の問題を新旧「英文学」の特質・価値の観点から論じたのが「『英文学』・英語文学の特質と成長」である。

別のシンポジウムでの口頭発表「オーストラリア版英語文学から再想像する冷戦期映画『戦場にかける橋』」「アメリカの影」あるいは「グローバリゼーションの終焉」をめぐる覚書」は、「アメリカの影」と東アジアの映画との関係を、「ヘリテージ映画」以降の英国映像文化と「英文学」という観点から再解釈し発表したものである。

こうした領域の研究成果は、新たに成城大学および東京学芸大学で立ち上げたポスト・ヘリテージ映画研究を含むトランス・メディア文化についての研究会にも、負っているが、英国映像文化を狭義のイギリス映画だけを論じることには限界があるので、いくつかのイギリス映画は、ヨーロッパのクラシック・オペラからアメリカのミュージカルやロンドン、ウェスト・エンド発の英国ミュージカルの系譜、英国のラジオやエディンバラ・フェスティバルを含むライト・エンターテインメントの文化、等々も解釈の対象にする必要があり、このような映像文化の素材あるいはマテリアルを、英国 BBC やパートナーシップを組んで教育番組を製作する Open University、Pearson 特にその教育部門を実地にリサーチした。さらに、翻案された「英文学」と連動した教育（特に、英語教育）については、英国ウォリック大学で英語教育に携わりイギリスの映像文化にも造詣の深い Peter Brown 氏にインタビューし、冷戦終了前後の東ヨーロッパ向けの放送メディア Radio for Europe や EU を志向したブレア/ニュー・レイバー以降の英国映像文化における東欧・バルカンについては、当時の independent journalist の経験をもつ Ursula Ruston 氏（現在英国在住）にインタビューした。

これらの成果は、『ポスト・ヘリテージ映画』の続編となる『英国映像文化のポリティカル・エコノミーあるいはトランス・メディア空間の編制』、さらに、それを補完する教育教材作成というかたちで発表する予定である。

(2) 冷戦期アメリカにおける「英文学」の制度化に関しては、ディスカッサントとして参加した 2011 年 11 月 5 日第 5 回関東支部大会のシンポジウム「冷戦期ナショナリズムの諸相」の内容を、さらに発展させ、2018 年ウルフ 3 月例会において、大谷伴子と共同で口頭発表した。同様の口頭発表として、「グローバル・ポピュラー・カルチャーあるいはメディア文化のなかの『英文学』」

文化冷戦のなかのウルフとラティガン」がある。さらに、同じ主題についての研究成果としては、【招待講演】「サイドのオリエンタリズム論と冷戦期アメリカのリベラル・イデオロギー」およびその前提となった論考「誰もエドワード・サイドを読まない？ 批評理論と冷戦期のアメリカ文化」がある。ウルフおよびブルーム

ズベリー・グループと冷戦期米国のニューヨーク知識人との関係が冷戦期の「英文学」文学研究の制度化にどのように関わっており、また同時にそこにジェンダーやフェミニズム批評の編制がいかに問題を複雑化しているか、再解釈した論考が、「ウルフ、ニューヨーク知識人、フェミニズム批評 もうひとつ別の『成長』物語？」である。

また、「英文学」の制度化と日本あるいは東アジアの関係において探り発表したものとして、「ポスト帝国日本の『英文学』」「『自由と規律』 英国の文化・教育の特質とはなんだったのか」という論考、ならびに口頭発表「ポスト占領期日本のなかの『英文学』——いま冷戦を考える意味」がある。(3) 福祉国家期に移行する「英文学」を編制した物質的・経済的条件を解釈したものには以下の研究成果がある。民間のパトロンネージから大衆メディアとしての新聞へ変化する歴史的な意味を取り上げたものとして、「エリオットの文化論、制度としての『英文学』、クリエイティブ産業」があり、*The Criterion* と Rothermere 卿夫人との経済的・文化的つながりを含め、論じている。

また、大学制度における学術的出版への変化を、教育・文化政策と合わせて、解釈した論考として、「功利主義の伝統と『英文学』のなかのロレンス 幸福はどのように表象されるか」があり、「マイノリティ・パンフレット」とケンブリッジ大学との制度的関係・あまりにもあからさまなマネーとパワーに関する非対照について、論じた。ケンブリッジ大学あるいはブルームズベリー・グループについては、論考「サイド、『アメリカの優勢 公共空間の闘争』、ウィリアムズ『文化の社会学』 アソシエーションおよび階級分派の概念の歴史化のために」で、より理論的に、論じている。

福祉国家期の教育との関連で論じたものとして、論考「アーサー・ミー、コドモ、ポピュラー・エデュケーションの価値」が、ノースクリフ卿が立ち上げた大衆メディアの教育部門によるグローバルなポピュラー・エデュケーションからオクスフォード大学出版局によってナショナルに制度化される過程を論じている。また、ハリー・ポッター・シリーズ以降の児童文学のグローバル化を、英国のガールズ・スクール・ストーリーの系譜によって歴史化した論考が「ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興とガールズ・スクール・ストーリー」である。

過去のハイ・カルチャーとしての「英文学」（あるいは、英語によるグローバルなポストコロニアリズム文化）とポピュラー・カルチャー（あるいは現代のミドル・ブラウ文化としてのヘリテージ映画）が交錯し両者それぞれの価値や関係性が決定されたり正当化されたりする場として、アーツ・

カウンシルの設立にもかかわった John Maynard Keynes を取り上げ解釈したのが、「ウォルター・リップマンの『自由全体主義』とは何だったのか ネオリベラリズムの始まりとしての一九三〇年代？」である。この論考は、1930年代から21世紀のネオリベラリズムとグローバリゼーションを連続してとらえる視座に言及したものであり、さらにより大きな研究プロジェクトと視座としてのポスト帝国のイングリッシュ・スタディーズの可能性をトランス・メディア空間において論じる必要性を提案した、大谷伴子との共著「成長のアンチノミーとトランス・メディア空間 ポスト帝国のイングリッシュ・スタディーズ」につながるものである。

以上これらを含む本研究全体の成果は、まずは、論文や論集等のかたちで発表し、本研究全体をなす個々の成果とともに、本研究代表者個人の単著『英国映像文化のポリティカル・エコノミー 変容する「英文学」とメディア空間の再編』として、出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

大田信良「「英語」学習とリーディングのちから」、『津田塾大学紀要』50, 2018, 155-79; 231-32. (査読なし)

大田信良「「アーサー・ミー、コドモ、ポピュラー・エデュケーションの価値」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』69, 2018, 71-82. (査読なし)

大田信良・大谷伴子「成長のアンチノミーとトランス・メディア空間 ポスト帝国のイングリッシュ・スタディーズ」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』69, 2018, 83-101. (査読なし)

大田信良「ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興とガールズ・スクール・ストーリー」、『津田塾大学紀要』49, 2017, 55-74; 301. (査読なし)

大田信良「「英文学」・英語文学の特質と成長」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』68, 2017, 47-70. (査読なし)

大田信良・大谷伴子「コドモの「居場所」はどこに? 英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』と教育空間の変容」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』68, 2017, 71-83. (査読なし)

大田信良「ポスト帝国日本の「英文学」」、

『英学論考』46, 2017, 19-39 (査読なし)

大田信良「「自由と規律」 英国の文化・教育の特質とはなんだったのか」、『英学論考』45, 2016, 33-55 (査読なし)

大田信良「ウォルター・リップマンの『自由全体主義』とは何だったのか ネオリベラリズムの始まりとしての一九三〇年代?」一橋大学大学院言語社会研究科2014年度紀要『言語社会』第9号 2015, 特集2 三浦玲一(査読なし) 149-62.

大田信良、「エリオットの文化論、制度としての『英文学』、クリエイティブ産業」*T. S. Eliot Review* 24(日本 T・S・エリオット協会), 2013, (査読なし) 1-21.

〔学会発表〕(計6件)

大田信良・大谷伴子「ポスト帝国の「英文学」とG・S・フレイザー——「現代的問題」としての「現代の英文学」の発明」日本ヴァージニア・ウルフ協会3月例会2018年)東京学芸大学非常勤講師大谷伴子と共同発表

大田信良「ポスト占領期日本のなかの『英文学』——いま冷戦を考える意味」日本ヴァージニア・ウルフ協会7月例会2016年

大田信良「オーストラリア版英語文学から再想像する冷戦期映画『戦場にかける橋』「アメリカの影」あるいは「グローバリゼーションの終焉」をめぐる覚書」成蹊大学アジア太平洋研究センター主催ワークショップ「東アジア映画における「アメリカの影」——不ノ可視の文化ヘゲモニーを探る——」2016年

大田信良「“After Modernism”の政治学と映像文化のエコノミー グローバル都市ロンドンの社会はいったいいつ存在したのか」日本英文学会第87回 SYMPOSIA 第四部門「グローバル都市ロンドンの表象文学・社会・アーツ」2015年

大田信良「グローバル・ポピュラー・カルチャーあるいはメディア文化のなかの『英文学』 文化冷戦のなかのウルフとラティガン」日本ヴァージニア・ウルフ協会3月例会2014年

大田信良、【招待講演】「サイドのオリエンタリズム論と冷戦期アメリカのリベラル・イデオロギー」「文化表象のグローバル研究」プロジェクト 第10回研究会成城大学グローバル研究センター 2014年

〔図書〕(計6件)

大田信良 「ウルフ、ニューヨーク知識

人、フェミニズム批評 もうひとつ別の『成長』物語?」, 『終わらないフェミニズム 「働く」女たちの言葉と欲望』(研究社)(査読有), 2016, 275-98.

大田信良 「ノエル・カワードと再婚の喜劇としての『或る夜の出来事』 『長い20世紀』のなかの映像文化」, 『アメリカ映画のイデオロギー 視覚と娯楽の政治学』(論創社)(査読なし), 2016, 106-35.

大田信良 「あれは幻の南方大陸か? ジェイムズ・クックの航海日誌」, 『旅にとり憑かれたイギリス人 トラヴェルライティングを読む』(ミネルヴァ書房), (査読なし), 2016, 21-43.

大田信良「サイド、「アメリカの優勢 公共空間の闘争」、ウィリアムズ「文化の社会学」 アソシエーションおよび階級分派の概念の歴史化のために」『文化表象のグローバル研究』(成城大学グローバル研究センター), 2016, 201-20.

大田信良 「功利主義の伝統と『英文学』のなかのロレンス 幸福はどのように表象されるか」『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会)(査読有), 2015, 94-113.

大田信良、「誰もエドワード・サイドを読まない? 批評理論と冷戦期のアメリカ文化」村上東(編)『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』(臨川書店)(査読なし) 2014, 335-68.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大田 信良 (OTA, Nobuyoshi)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号: 90233139